

(ページコラム 2)三四郎池のほとりから

先ごろ、本郷の近くの美術館に行ったついでに、東大構内に入って、三四郎池のほとりに立った。ちょうど、紅葉と黄葉が盛りで、とても美しかった。ほぼ半世紀昔の学生時代にも、何度となく、ときには友と連れ立って、また、ときには一人で、この池をながめながら、語らったり、思索にふけったりしたものだが、それほど池の風景が美しかったとの記憶は残っていない。

もちろん、昔のことだから、忘れてしまったのかもしれないが、若い時代の私には、よい風景を見ても、それをじっくり眺めて、強い印象を抱くといった感受性がやや乏しかったような気もする。実際、文学作品などで、延々と風景描写が続いていたりすると退屈で、その部分は読み飛ばす場合が多かった。

と言っても、思い出してみると、今でも強く印象に残っている風景もあった。学生時代に、友人と二人で北海道へ旅行したが、彼には札幌で旧帝大の陸上競技会に出る予定があって、道東方面は私だけの一人旅となった。

列車から眺める風景自体が、本州とは全く異なり、「原野」という名にふさわしく、水平線以外見たことのなかった私に、地平線というものの存在を初めて見せてくれたのには感動した。また、最寄り駅からのバス便のタイミングが悪く、かなり長時間歩いて、摩周湖を展望するところまでたどり着き、周囲はほぼ無人の状況の中で静かに見下ろした摩周湖の美しさは半世紀たった今も明確によみがえる。

また、札幌から小樽へ行って眺めた海も美しかった。太平洋側で育ち、海と言えば黒潮しか知らなかった私には、なるほど絵の具で水色と言っていたのは、これのことかと感じ入った次第である。その後、北陸方面を途中下車しながら何日もかけて旅した際にも、日本海の文字通りの水色には、とても魅せられた記憶がある。

古希も過ぎて、学生時代などを思い出し語ると、なんでもが良かったように言う人もいるらしいが、私の場合、そんな気分には特にならない。

ただ、大学に限らず、昔なじんだ風景や建物などを、かなりの時を経てそのままの形で目にすると、心をなごませることは確かである。東京大学の本郷キャンパスの場合、主に関東大震災後に建てられたと言われる茶系のタイル貼りの建物群が、私の学生時代も今も、ほぼ変わらずに残っており、半世紀の時を経て大変貌してしまった東京の中であって、よくぞ大学はそのまま残してくれていると思えてうれしい。

大学よりも、私がよほど長い年月を過ごした旧文部省の建物は、東大の建物群に比べ特に古かったわけではないと思うが、超高層ビルに建て替えられてしまった。ところが、だれの発案かはっきりとはしないが、以前の建物の一部を残してくれたので、地下鉄の虎ノ門を降りて、これを見るたびにほっとする。発案者には、感謝したい。

年の暮れなので、小難しいことを論ずるよりも、三四郎池のほとりに立って、次々に連想したことなど、随想を記した。